

城山山麓の墓所（八）

先人の跡をしるのぶ

山本

（会員・佐伯市池船）

一 中島損の墓

佐伯市城下東町・毛利家累代の墓所より、少し離れた一段高いところに、次のような墓がある。

その墓石には

(1)時軒中島損墓（正面文字）

（左側面文字）

君諱（いみな）は景損、字（あざな）は益夫、号時軒

又時習齋、通称熊一郎

本姓木許氏、出でて中島氏を継ぎ、世（よよ）佐伯侯に仕う。

君姓硬正質直、時流に阿（おもね）ず、読書学剣各造詣する所有り

安政元年（一八五四）正月、泰雲（佐伯藩主十一代毛

利高泰）の扈從として江戸に入る

文久三年（一八六三）温良公（佐伯藩主十二代毛利高謙）始めて就国し、文武之士を大いに奨励す

君特に若干俸を受く、蓋（けだし）異数也

是に当たり、天下騒然、幕府大いに府下を警戒す

佐伯侯幕命を奉じ、佃島及び道玄坂の衛を守る

君会（たまたま）江戸藩邸に在り、揆ばれて衛士となる

慶応元年（一八六五）任滿ちて帰国す

同 五月演武館助教となる

同 八月四教堂教授

慶応四年二月王政復古、温良公（毛利高謙）相観、君護駕して京師に入る、君亦扈從として帰る

明治四年（一八七一）七月朝廷下広く廢藩置縣の大会

同 十月佐伯藩少属となる

明治五年（一八七三）三月廃官

明治六年（一八七三）六月より同十一年に至るまで、

地方行政の職を歴任

後致仕（退職）して、専ら読書撃劍の事に従い、子弟

を誘導して諄々、倦（う）むことなし

明治三十六年（一九〇三）七月二十九日病没

佐伯町鼎山養賢寺の側距に葬る

天保七年三月六日生まる

享年六十八、配佐藤氏、三男六女生まる

長子弥六家を嗣ぐ

明治三十七年十月

従五位 谷謹一郎記

明治四十二年四月七日

孝子 中島弥六建之

碑文は、むずかしい漢文でしたので、平易にする為、

段落や送りかな等をつけた。

そのほか、

(2) 幽松院愛琴大姉（中島熊一郎妻、行年八十五歳）

大正十年六月十三日建之

(3) 中島家之墓（中島弥六、シン、終吉）

昭和五年十二月

中島祐吉建之

(4) 関安人墓（正面文字）

（左側面文字）

児諱安人 余第五子也

生而慧敏 有燕頷虎頭之相性

好馬及僅移步 抽斗為馬 善騎易以木馬

常為馳驅奔競之状 毫不失足也

授兄以孝經 在傍善踊 平素嬉戲 所言多類

童人皆憫々 然期其致遠焉

一日横井舅氏 贈百合二莖 著四萼 兒忽擊一蕾 開

之 乃不円花之為讖

明日 罹暴疾 奄然 然為萬里之行

年僅五齡 真如夢 余望尽矣

嗚呼傷哉 苗而不秀者歟 維時明治十九年六月十九日

也 謹麒麟

童子葬千龍鼎山銘曰

花而期実 有風誤花

金環留在 豈向佗家

奎所老人誌並彫

天賦之敏慧 吾期以玉珉

一朝被帝召 天上化麒麟

島損題

これは中島損の碑文ですが、難解な漢文体のため、段落などを付して平明にした。

中島家系図（故羽柴弘先生調査）

中島子玉——熊一郎——弥六——祐吉



中島子玉と子息資太郎の墓は、佐伯市城下西町、碧松山久成寺（日蓮宗）境内に、そして、熊一郎、弥六などの墓所は、龍鼎山養賢寺（禅宗・妙心寺派）の裏山にある。

中島子玉自筆による「龍川舟遊七首」の詩の絵巻物は東京都世田谷区粕谷三一九一六 中島謙吉氏が、保管されている。

故祐吉夫人房子さんは、佐伯小学校時代、近衛文麿公爵夫人千代子（旧姓毛利千代子）さんの学友であった。現在、佐伯市教育委員会に保管されている「中島時軒蔵書」印のある多数の漢籍は、中島熊一郎先生の所蔵本であった。

以上、中島時軒の経歴、蔵書本、あるいは故葛飾県知事秋月橋門先生碑、関安人墓の碑文などをみても、佐伯地方第一流の漢学者であったことが理解できる。

二 中島損と国木田独歩

(1) 中根貞彦先生は、次のように語っていた。

「私立鶴谷学館は英語、数学、漢文の三科目だけ。

独歩の前の英語の先生は、久代孝次郎という、あごまで美しいヒゲを蓄えた年配の、風采のいい先生であった。わたしは、パーレーの萬国史を習ったと思う。数学の先生は、わたしの長兄より一級下の師範学校

出身の石田豊城で、代数を教わった。

漢文の先生は、剣道練達の元漢学者の中島熊一郎であり、習ったのは十八史略ではなかったか？」

(2) 山内武麒先生も、左のように述べている。

「鶴谷学館の課目は、英語・数学・漢学・理科・剣道であって、独歩在任の間は、独歩が英語と数学を担当し、漢文と剣道は中島熊一郎氏、理科は石田豊城氏が担当していた。

中島熊一郎氏は当時、時習学校と称する漢学私塾を開いていた。石田豊城氏は、当時の南海部郡高等小長であった。この二人は兼任であった。

特に中島熊一郎氏は、当時五十八歳で、気むずかしい漢学者であり、大の耶蘇ざらいであった。

独歩排斥運動の背後には、中島氏の勢力があったことは疑いをいれない」

佐伯市養賢寺御成り門近くにある「故葛飾県知事秋月橋門先生碑」は、四教堂旧門下生などによって建立されたが、そのいしぶみには中島損謹誌、高妻友直謹書の文字が、彫りこまれていて、そこには、橋門先生の人物像が、巧みに描かれている。

(3) 中島時軒経歴その他

| 年号 | 西暦 | 事 | 項 |
|-----|------|----------------------------|---|
| 天保五 | 一八三四 | 中島子玉没、三四歳 | |
| 〃七 | 一八三六 | 中島時軒生まれる | |
| 〃一二 | 一八四一 | 秋月新太郎生まれる | |
| 弘化四 | 一八四七 | 高妻芳洲、秋月橋門四教堂教授 | |
| 嘉永三 | 一八五〇 | 矢野龍溪生まれる | |
| 安政元 | 一八五四 | 毛利高泰参勤交代のため江戸へ赴く、時軒も随行する | |
| 文久元 | 一八六一 | 高妻芳洲没、五一歳 | |
| 文久三 | 一八六三 | 毛利高謙江戸より帰国し文武を奨励する、時軒若干俸受領 | |
| 慶応元 | 一八六五 | 時軒演武館助教、更に四教堂教授に就任、明石秋室没 | |
| 同四 | 一八六八 | 王政復古、毛利高謙京都に赴く、時軒、龍溪随行する。 | |
| 明治元 | 一八六八 | 秋月橋門葛飾県知事就任 | |
| 〃四 | 一八七一 | 廃藩置県、時軒佐伯藩少属就任 | |
| 〃五 | 一八七二 | 時軒退職 | |
| 〃六 | 一八七三 | 数年間地方行政職歴任 | |